

日本の紋章に於ける圀形式の分類と視覚的一考察

佐 藤 武 郎

序

これまで紋章は歴史的に、また系譜的な意味から紋章学のジャンルとして扱われてきているが、工芸史が当然今日に於てはデザインの創作的裏づけとしての歴史である以上、日本の「かたち」に観るところの紋章形式の重要性は必然的に、その項目に列挙すべき性格のものでなければならない。

こゝでは紋章の基本的構成要素の一つでもある7つの圀形式（殊に紋章に於ける数的に最高の円圀形式紋を中心に視覚的観点から考察してみたい。

参 考 (1)

紋 総数	4446
円 形式（註次項円線形式も含む）	2055
円線形式	800
菱 形式	304
六角形式	50
四角形式	29
八角形式	26
三角形式	6
その他形式	1257
◎素材総数	203

参 考 (2)

紋章の素材別分類（沼田頼輔氏の分類より）

植物 紋	48科・93種
文様 紋	幾何学的図形
天文 } 紋	日・月・星・雪・雲・山・水・波等
文地 }	
図符 紋	図式及び呪符等
営造物紋	神社・仏閣・家屋等
器財 紋	神仏具・武具・生活道具・服装品・玩具・銭等
文字 紋	
動物 紋	鳥・哺乳類・軟体類・想像物等

参 考 (3)

平面の形を（shape）と呼び、形と云う言葉をつかう立体の場合は、形を形態（Form）と云う言葉で表現

し、平面と区別する。（デザイン用語）

圀形式について

紋章の基本的圀形式の分類は参考(1)でもわかるように円形式は紋章総数のうちその7割近くをしめしている。

純粋に円線圀紋のみを取りあげてみても、他の形式紋より遙かにその数の多いのに気がつく。

11世紀後半に起ったとされる紋章が江戸時代に整理され、その素材である植物・文様・天文・地文・図符・営造物・器財・文字・動物の8つの部門、素材総数にして203種類の多くが、紋章の基本的構成条件である対称形の統一に準拠して、4,500余の驚異的なバリエーションの展開をみた。

紋章のデザイン活動に従事した当時の人々は、紋章が後世に至って、数千にも上るバリエーションにまで発展しようとは予想もしなかったであろうが、とにかく7種類の圀形式を基本型とする円やそれに近い円的な形式、菱、三角、四角、五角、六角、八角等の幾何形を単位として設定し、その形式の中に203種類からなる生活を中心とした身近な素材を選択して、7つの圀形式（幾何形）の中に定着させると云う紋章のためのデザインを試みたことは、現代のデザイン感覚の観点からしても、日本の紋章の「かたち」の上に、新鮮にして美的な秩序と統一ある変化をあたえ、視覚的伝達の目的からも見事な諸効果をあげさせる好結果をまねいた事になる。

圀形式の設定に関するデザインの発想は、紋章デザイナー達の卓越せる造形感覚の結晶であり、また紋章の素材に対するデザインの扱かいの点で、目的のためのバリエーションを考慮しての対称法的表現形式や、紋章デザインのための割出表現手法の根底には、これまで述べた7つの圀形式と云う視覚デザインの周到な計画がなされていた事は、現在のデザインに於ても大いに見直すべき問題であろう。圀形式は紋章デザインに於ける根本的な構成要素であり、数千にのぼる紋章に統一と変化をあたえる単位であったことは重要な意味をもつものである。

紋章の発想と定着の目的は武家制度の時代の必然的な家紋としてのデザインであり、その意味からも完璧なまでに美しい秩序ある見事な構成をもつ日本の家紋は、7つの選ばれた圀形式によって完成されたと考えてよい。

円形式の発想を視覚的に考察する場合、2つの事柄が

あげられる。

一つは円形の源を古代に於ける太陽崇拜の習慣に起因する原始感情の残査とみて、後世の紋章形成に結びつける円形表現の執着だとする見方。他方は、歴史的観点より日本の性格の形式化として、造形要素の一つに円的なものがあり、それが紋章にもちこまれたと云う見解である。

円形については、古墳時代の装飾壁画の調査でもわかるように、円形紋様が数的にも最高である。装飾古墳に用いられた装飾図文に、円文または同心円文が多いと云うのは、太陽を表現していると観てとれるもの、鏡を表現したと考えられるものの2点が現在定説とされている。それらは、いづれにしても紋章デザインに於ける形成と関連をもち、その遠因であると言うことは、不明確な点が多いにしても否定できない事柄である。

三角紋も円紋も菱形紋も、その輪郭は既に、当時の装飾紋の中にその形成をみている。

古墳時代の文化人達は、円・三角・四角・菱の模様の構成にみられる美的効果を当然明確とはいかないまでも感知していたと考えられる。

円は技術的にも簡単であり、装飾効果大きく、技術的にも、中心点に心棒を立てて廻転させる文廻しによって容易に表現されたと云われ、またその数も圧倒的に多いが、中世以後の人々が高度な技術と経験によって、正円を表現するのは技術的な面から考えても極めて自然な形で、それを紋章デザインの構成にもちこみ活用したであろうと云う点もうなずける。

その点については、構造的な漢字の固い表現形式から律動的な線の流れの美しさを仮名、平仮名まで発展させた日本の性格にみる円的性質をもつ造形感覚と共通な要素がある。

古来日本の人々は円的要素を文学的に、視覚的に愛着をもっていた。それは日本の性格の一面と考えてよいが、紋章形成の裏づけとして考慮すべき問題であろう。

円は視覚的には、直線形より訴求力をもっていることは、モダニズム絵画の作品やビジュアルデザインの内容表現に多くみられるので理解できるが、長尾みのるの「目立つデザイン」の調査の中にも、円・三角・四角の中に円を配置して1/2秒その図を示めて、どの形が印象に残ったかの問に対し、7割は円が見えたと答えた事柄について述べているが、それは円が他の幾何形よりも視覚的に訴求効果と視覚伝達の面で一番よく目立つ事を意味している。

円の性質から考えてみると幾何曲線は、幾何直線形のもつ安定・信頼・確実・強さ・明瞭・秩序の正しさ・簡潔などで表現して云う性質に対して、円の場合は総てに

於て直線形より柔軟であり、数理的な秩序が感じられ、明確性・理解しやすさ・上品さ・整然としている等の性質上の相異点を示めている。

円の性質でも明らかのように、紋章デザインに於ける円形形式の場合にも、日本の性格と円形式の結び付きは、紋章デザイナーに対する紋所の依頼者側の意志表示により、その目的である明確さの要求が他の直線形式紋よりも、数多くの円的形式のバリエーションを生む結果をまねくに至った。それは円の性質が、視覚伝達の面からみても、他の形式紋より最大の訴求効果を示めすことを、依頼者側は実際上の使用経験から十分に認識していたにちががなく、当然他の形式以上に円またはそれに近いものを要求したからに他ならない。

いづれにしても、紋章デザイナーと紋所の使用者側との目的に対する制作上の共通な諸条件が、紋章の「かたち」の上に、円の性質の円形式に集中し統一の傾向をみせた原因は、当時の武家階級層が最高の知識人であり、デザイナー達の最上の理解者と協力者であったために、紋章は目的、機能、形式の点で完璧なまでに美しく見事な造形をみせるまでに成形されたと解釈してよからう。

また紋形形式設定理由の根底には、紋章デザインのための技術的表現処理法として、染めに於ける型染の手法があった。紋章表現の発想から定着までの工程は、終始一貫して型染の手法にみられる制約に容易であるように計画され「かたち」に整理されていたことは、紋章デザインの構成表現の重要なポイントとして見逃がせない問題である。

紋章はその性質上、同一形式紋を量的に生産しなければならぬ内容で形成されているから、技術的生産方法としては、日本の優ぐれた染めの手法が活用されたのは好都合であったし、型染は量産に最適の染めの技法でもあった。当時、紋章の利用度は染物が中心であり、染めと紋章デザインの結び付きは歴史的にも古く、その手法である型染は、紋章の乱生期でもあった鎌倉時代の紙の発生に平行して展開していったと考えてよからう。また染めの技法の約束事は、紋章デザインの構成表現に於ける陽と陰の基本的表現形式を生み、それは同一内容表現の紋章構成を白と黒の異なる感覚でみせる素晴らしい表現効果を発見させることにもなった。

白・黒は、最も原始的な表現手段であるとされながら現代の感覚からしても、強さと明快さの点が大いにデザイン面で表現上の重要な手法として用いられて居り、そのモノクロームな色彩効果は日本の章紋の「かたち」にみられる新鮮で明快な、それでいて単色の美しさを十分に発揮させるにふさわしいものでもあった。陽紋、陰紋にみる単色の美しさが紋章の生命でもあると云っても過

言ではない。

菱囲形式は円囲形式の次に数的に多い。

正方形の安定性は、視覚的にも強調されて大人しく目立たぬ傾向を示めすが、90°傾けるとその正方形は全くその安定性を離れて、異質な表情と動きを生じ菱形に変化する。円形式の次に数的に多いのも訴求効果が大きいためである。また型染の制約上の面から考えた場合、円の次に素材表現のスペースの点で、また型染の手法上の基本的まとめ法としての対称的形式に合致しているのが紋章デザインのための構成条件に適したことになる。

三角形が他の形式紋に比較して僅少なのは、上向きの三角形と逆三角形による、総合形体が菱形であるのに対し、三角形のもつ素材表現上の、スペースの点で紋章デザインとしては不適な原因とされた。紋章デザインとして三角形が使用されているのは独立した単位ではなく、総合的な紋様構成の点で位置づけられている事からもわかる。三角形は、集会的構成紋として考慮されているのが特徴である。

四角・六角・五角・八角による形式が三角形も含めて円や菱に比較して数的に少ないのは、多角的形式は円に近づく要素をもちながら、円の訴求効果より弱い点が避けられたと考えられ、直線形の性質と円形の性質の中間に存在している点で、紋章デザインの性格を弱め、数的にも少ない結果を生じたと推定される。視覚的にも明快さを、色彩効果の面でも単色な美しさを要求し、基本条件とした紋章デザインの態度からみると、多角形の形式は、変化と嗜好性の範囲で形成をみたのであろう。

円やそれに近いもの、菱の形式が紋章構成の主流となっている点は、現代デザインの観点からして、視覚的に訴求効果と視覚伝達の面から紋章デザイナーとそれを取りまく人々の日本の「かたち」に表示した高度な美意識を見直したい。

結 び

この項では、紋章に於ける囲形式についての、基本的構成による分類と、その中で特に中心となる、円囲形式をめぐる考察を試みた。しかし紋章デザインとしては他に素材とバリエーションとの関係や、その展開順序にみられる構成要素、生産工程に於ける染めの制約条件、また創作上の能力的限界などを考察の内容としなければこのテーマはまとまらない。次回は以上述べた点を含めて、考察をすすめたい。

——短大工芸史に於ける日本の紋章と
デザインについての項より——

基 礎 文 献

- 1 サインとシンボル
- 2 めだつデザイン
- 3 紋典・標準紋鑑
- 4 日本の家紋
- 5 紋章について
- 6 日本原始美術 5—古墳壁画
- 7 近代デザイン感覚入門
- 8 ひらがな—文字デザインシリーズ 2
- 9 デザイン心理入門
- 10 グラフィックデザイン入門
- 11 日本の直線紋様
- 12 染ものの技法
- 13 デザインの意味
- 14 デザインの基礎

以 上